

ものであります。西洋では薪を背負つてゐる人といつてゐますが、月面を望遠鏡で見ると明るい所は凹凸のある所で暗い所は平らな所であります。その明るい所には山があつてその影までよく見えるのであります。月の山は地球のものとは大に異り、一種異様であると申します。平地も風変わりでありらしいが、注意すると是等の形状は多少變化する想であります。兎の餅搗の姿勢が段々變化してゐる譯であります。これは長年月に亘つて觀察せねばよく分りませんが、勿論吾々に向つてゐる月の半面には空氣もなければ、水もなく隨つて生物が居る道理がない。兎が餅をつく譯でもなく、薪を背負ふ人がゐる筈ありません。

あまつゆに汚れて涼し瓜の泥

はせな

たとへばなし

お月様は器量自慢で、誰にでも遇ふ度に、

「お日さん程可哀さうな者はない、年が年中汗水たらして働いて居ても、人が見かへりもしやしらない。それに引きかへ、私は時々しか顔を出さないのであれども、顔を出す度に下界の人は夢中になつて、綺麗で美しいと云つて騒ぎます」と吹聴しました。其の吹聴が餘り度過ぎるので、人間と星とを除いて其の外の天地萬物は皆んな太陽に加勢する様になつて仕舞ひました。

それだから御覽なさい。太陽が出ると空が第一に綺麗な綺麗な色になります。山には美しい霞がかゝつたり、雪の頂が火の様な色に輝いたり、森の中には影や日向で縋を織り、野は見渡す限り活々となります、そうして太陽が沈む時には、草も木も鳥も獸も、別れを惜んで皆んな黒い喪服を身に纏ひます。

月が出て月に加勢するには、かすかな光の星と、あちこちでかすかに唾を開く水とがある計りです。成る程、人もほめます。

然し太陽は人がほめるほめない位は平氣で居るんですと

ら。

——有島全集より——